

## 公開講演会発表要旨

**中世庶民の食器類** 13～14世紀の中世前半の西日本を中心にして、当時一般に使われていた食器にはどんなものがあるのか、遺跡出土品と絵巻物に描かれた状況などを比較し、今後の中世食器類研究の問題点を探りたい。食器の種類・用途は、供膳具の椀・杯・皿、調理具の搦鉢・こね鉢、煮沸具の鍋・釜、貯蔵具の壺・甕が基本である。これらはその材質・形態などをみると大きな地域性があり、またその中での変遷がある。このうち問題となるのは、供膳具では漆器の普及状況、調理具では軟質焼成の搦鉢の盛行、煮沸具では石鍋や三脚付鍋・釜の分布などの点についてである。このような食器の様相は当時の政治・経済的背景と関連するものであり、中世食器類の地域性と変遷については今後とも詳細な研究が必要である。 (安田龍太郎)

**年輪から年代を読む** 1980年以来、中部および近畿地方産の現生樹木と、7, 8世紀に属する飛鳥・藤原、平城の古代都市遺跡出土木材、古建築用材、その他を資料として、年輪年代学の研究を実施してきた。現生木による検討の結果から、従来の通説に反して、わが国でも少なくともヒノキ、コウヤマキ材を用いれば年輪年代学が十分に可能であることを実証した。すでに、現生木(主に木曽ヒノキ)で作成した標準年輪曲線は現在から1693年まで完成している。さらに、遺跡出土木材(主に平城宮跡出土の柱根類)を用いて、ヒノキ材で637年分、コウヤマキ材で610年分の標準となる年輪曲線を作成した。これら2種類の年輪曲線を使って遺跡出土材や古建築部材とのクロスデーティングにも成功し、成果を得ている。 (光谷拓実)

**古代仏殿のイメージ—金堂の原形を求めて—** 山田寺金堂が発掘された時、その平面は古代建築の常識を破るものと評価された。しかし、三重・夏見廃寺、滋賀・穴太廃寺両金堂の発掘成果がこれに等しく加わった現在、もはやこれらは異端ではなく、我が国では7世紀を下限とする金堂建築の古形式に属するものと考えたい。今は失われたもうひとつの金堂建築のイメージを喚起するため、その原形を特に中国の仏殿の図像や小建築にたずね、その表現の建築的意味を検討し、その古式たる所以を明らかにした。この形式を前提として、はじめて法隆寺金堂が金堂の発展過程のなかで占める位置や、玉虫厨子の建築的表現の意味が明らかになり、それが、ひいてはいわゆる飛鳥様式の解明にも寄与することであろう。 (松本修自)

**日本古代の冠帽** まず、中国においては、歴代の王朝が服飾制度を完備し、身分・官職に応じた冠の着用を定めていたことを示した。また、朝鮮半島においては、新羅統一後の648年に唐に倣った冠位制度の導入をみるが、すでに三国時代高句麗・百濟では4世紀代に、次いで新羅では5世紀代に、中国とは異なった独自の冠位制度を採用していたことを中国正史の記載や考古資料から推定した。一方、日本においては、5・6世紀の各地の古墳からこれまでに30余例の金銅製冠帽が出土しており、推古11年(603)の冠位十二階の制定に先立って冠位制度の存在したことが想定されるが、冠帽の形態には中国・半島三国のように規格性がないことから“大和朝廷”による地方豪族の組織化は未だ不十分であったことを推測した。 (毛利光俊彦)